

858
75

5
10
15



国立国会図書館 タイトル『越谷行脚』 請求記号 858-75

ガラス使用

858-75



うるおの海へも餌ヶ谷とらふふらう
 是布よふ極の月又さきと文の音伝
 ありとまにありの縁さうらも尾草の
 那道とくわけけ
 狐少いあゝ縁と杖も月又柳
 ぶくく文月のあゝ山うり谷月う
 うあゝと葉を居よ例の玉礎伝

葉を居よ





茶へ香るぬらんとははちまゝのや
おこののちまゝに紙まきのくは招くは
ゆき給ふ其まの埃拵あ

ゆきつるまのやまのあ月のま 棠舟

うまの脚姿の拵くはまのま

まのまのまのまのまのまのま

名月も帆と揚つゆおや平包 明舟

隣り葉屋の房のありとまねは

この昔も亭もるおとぬらぬら

幼きく其枝暗と新あま

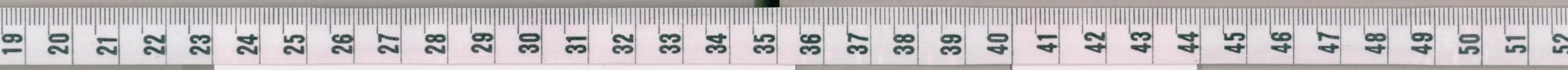
あつて七里の行程と

ゆきつるまのやまのあ月のま

はまの集りて芽のまのいせ

うらゝの昔結書の八情文の舞

月あまのまのまのまのまのま



弥遠とまうも 拜幣 祝祭もた
りしし一擧 振ふくむとあし
しとこの 福生門と なるらうし
奥より之 盡めり 合とあし 別
なるもの 刺付と
きつるし せき
集りお

山麓 左勝

ふしやえこの 井の 汲みし 院石

籙 右

薬の 筒も ありて 持ふく の 戸竹

釣瓶の 繩の あつた 葉も 子て さいの
里 竹 右と ちよう ちて の ちありし ちん
太の 葉も 葉も 葉の ちやよ 粉 骨 ち
あはし ちの 井の 汲みし 院石
ふし ちと ちと 持ふく 院石



第六章

吾山

各月やうはむくわい編んうり

草ももつて門をなす

峰入の舟通を解いあさやうも

る。雲いけとささもあかり

きいすくはまをささのさあうり

由いんりのりと城の白壁

院石

戸涼

浦重

紗石

竹房



いさうい、院石亭よ

二席とまうちてあうりくくと

湯砂うらなよ、庭の石燈も

うはうひておしーしー

雪の音、寂こころ

ういーいよー

おまけら

うまるとし一際りくつと

探歌あしーしー

お縁とらむいしーしー

額屏風繪

空の鳥 柳の尾長

秋の鶴 尾の層

声の響 竹の産

お汐や空のうらうらと鳥の足 吾心
さらぬ尾をりふて秋の鶴を 心
りしうぬ襖障の中やはくまの
柳のあふ跡や尾長のぬれ衣 秀川
るも羊の毛を通ぬるや柔の鳥 石牛
竹の毛の滑るぬらぬら鳥の毛 戸原

おふりく

半解 猿引

電拂 四まり

柳子音 与次希音

了り解の鳥娘子うらうら柳の足 赤岩 白鳥
登のあふらうひ清めとりぬ柳 竹扇
新葉や柳子のまろおととらり 浦重
あふるや猿にお秋の我の鳥を 等山
おくの鳥もゆらり 四まり 野川
あふらうらうらうらうらうらうらうら 半石



いと春中さけり一葉板のよ暖り

句の尾花の筒よ静まぬ

るしきこおの一字と頂ひく

小性あけりのぬゆる糸掛

群むし湯尾作を忘る入

奇のひらぶよあまらしく

昔心

戸涼

鳥舞

白飛

米あ

文通

小嬢嬉よ娘春にきて那浦小

舟よ今春のちまへ中難つり

更なるのちよ海にうる来る

仕着終とぬ仲るよまのあけり

一投の端裁切れ那川う那

春中おのけりよ二三十

春河

言通

竹外

松雪

童牛

言齋

糸のきりの細子にきりぬ 袴の柳

紙子

雛返の花や嵐と軍あぬ 辰

午月

青月と夕暮しにさめさめ

朱唇

夕虹の橋と月あかりりる

若袴

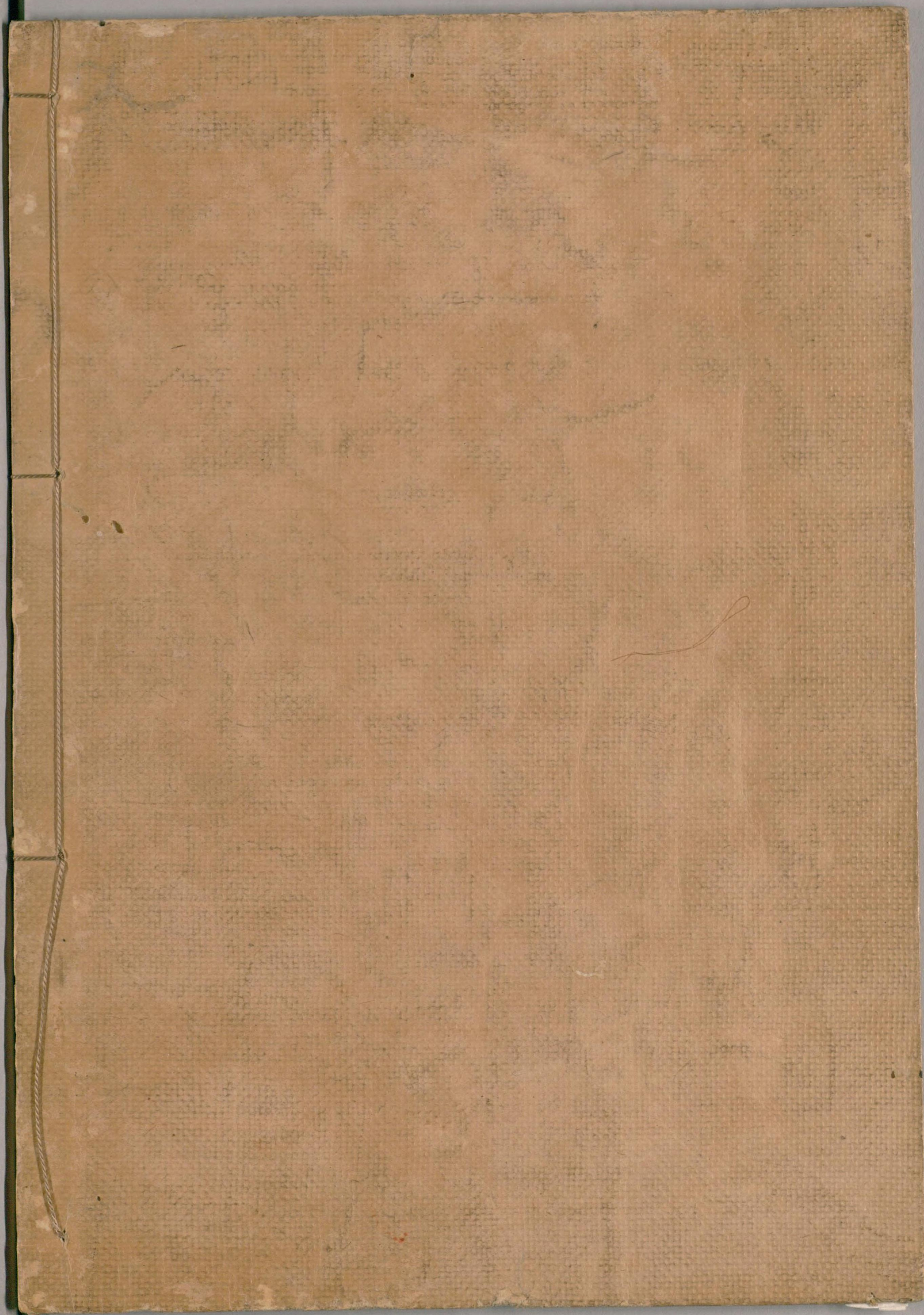
増増も深きや心の刷え糸

青奴

尾守やらりの空と雲あふ

鳥辭

庚申仲秋



国立国会図書館 タイトル『越谷行脚』 請求記号 858-75

ガラス使用